

町田市の小山田緑地を歩いていると、遊歩道脇の斜面に、落ち葉の間から真っ赤な指を突き出したような奇妙なキノコを見つけました。猛毒菌として知られる「カエンダケ（火炎茸）」です。傘も柄もなく、赤橙色の太い棒状の子実体は何本も立ち上がる姿は、まさに地面から炎が燃え上がっているようです。私は長年キノコを観察してきましたが、実物を見るのはこれが初めてでした。

カエンダケは、食べれば命にかかわるほど毒性が強く、さらに子実体の汁が皮膚に触れると炎症を起こすこともあるため、素手で触れないことが原則です。「触るだけでも危険」というキノコは、昭和以来私が見てきた数多くの図鑑や写真集では、ほとんど記憶にありません。そのため、比較的新しく知られるようになったキノコかと思いましたが、調べてみると意外な歴史がありました。

実は江戸時代の『本草図譜』にすでに「火焰たけ」として描かれ、明治時代の1895年には学名も正式に記載されています。つまり、昔から存在が知られていたにもかかわらず、長い間めったに出会えない「珍菌」だったのです。ところが近年は、ナラ枯れが広がった地域などを中心に発生が目立つようになり、身近な公園や緑地でも報告されるようになりました。鮮烈な赤色の姿に思わず近寄りたくなりますが、これは見るだけにしたいキノコです。初対面の喜びと同時に、その毒性と自然環境の変化を考えさせられる出会いとなりました。

(2026年9月中旬／東京都町田市小山田緑地)

